



しんたつ、みらいプロジェクト

前編：「シゴトの、『びゅーてい』な！『むーびい』プロジェクト！！」

後編：「みらいへはばたけ！世界の『びゅーてい』大使プロジェクト」

学びのストーリー

～しんたつ流、プロジェクト型学習の記録～



～自律の先の自律へ～

ひと ひと ひと
～人間として他人の心がわかる人～

＜はじめに＞

今回のプロジェクトでは、「働くこと」つまり仕事について学習します。さて、さっそくですが、君たちが学習する教科の中に『仕事』という教科はありましたか？中学校にはありませんし、高校にいても仕事という教科はありません。大人になったらみんな働くのに、なんで仕事のことを教えてくれないの？と思ったことがある人もいるかもしれません。また、「数学ってなんで必要なの？買い物するときの計算だけできたらいいじゃん！」「歴史なんて勉強して何になるの？昔のことなんて関係ないじゃん！」「私は日本で生活するから英語なんかいらないわ！」「地域清掃とかしたって、どうせまた汚れるではありませんか。自分に関係ないことはやりたくないぞます！」、こんなことを一度は考えたことがある人も多いのではないのでしょうか。今回のプロジェクトの前に、君たちに問いかけたいことがあります。

①あなたは何をして生きていきたいのか？

②あなたは他人とどう関わりたいのか？

③あなたは社会にどう貢献したいのか？

さて、どうですか？今回のプロジェクトを通じて、この問いかけに関する現在の最適解を見つけてもらうのが、今回のゴールです。このゴールを切る時には、義務教育最後の年を目の前にしていることでしょう。来年の今頃は自分の進むべき道に向け、力を身につけていくこととなります。また、最高学年として、伝統を下につなぎ、託すことも求められることでしょう。その時に、3つの問いかけの答えが深ければ深いほど、学習に対して前向きに取り組めるはず、そう信じて2年目の探求を考えました。あとは君たちがどのように考え、問いに向き合うかだと思います。1年目のびゅーてい大使の取り組みが本物なら、今回のプロジェクトはもっとたくさんの人に発信し、魅力あるものになる、そんなことを期待しています。

それともう1つ。今回のプロジェクトはパナソニック教育財団に選ばれた全国77校（うち中学校は16校、大阪の中学校は君たちだけです）の取り組みとして発表をします。君たちの取り組みがみらいの教育の発展に貢献します。中学生でも社会に貢献できることがたくさんある、そんな夢ある取り組みにしてください。

最後に、9年間の義務教育も残り2年をきりました。君たちは今までの7年間の中で、数え切れないくらいの質問を与えられ、それにずっと答えてきました。しかし、これからの社会をよりよくし、より良い生活をするためには、自ら問いを立て、課題と向き合い、最適解を見つける、この繰り返しが求められます。にも関わらず、学校生活で自ら問いを立てることをあまり教えてきませんでした。そこでそんな力が必要なら、義務教育の間にその力をつけるきっかけを提供しなければならないと考えたわけです。このようなことを踏まえた上で、主幹となるプログラムは用意しました。が、ゴールに向けて彩りをそえるのは君たちの思いや考えです。世界の未来を考え、自分の未来を創っていく、そんなプロジェクトだからこそ、「しんたつ、みらいプロジェクト」です。

1. 取り組みの7つの方向性 7つの「みらい」に迫ります。



その1：みらいの「心」プロジェクト

今年度の学年テーマである「自律の先の自立へ」に向けて、活動を通じて未来をたくましく生きる心を磨きます。昨年度に行った「びゅーてい大使プロジェクト」を継承して学習を進めていきます。



その2：みらいの「むーびい」プロジェクト（文化発表会）

前編の柱となるプロジェクトです。「仕事」のびゅーていを『むーびい』でまとめます。発表は文化発表会で行います。時間制限があるため、発表方法はプロジェクトチームを立ち上げ、検討しながら進めます。



その3：みらいの「プレゼン」プロジェクト（研究発表会）

しんたつ、みらいプロジェクトのゴールです。パナソニック教育財団の助成校として、研究発表会（2月予定）を行います。その発表会に大阪市教員・府外の教員・教育関係者・地域・保護者・お世話になる方々・大学関係者など、多数の参加を呼びかけます。そこに君たちの活動成果を発表する場を作ります。1年のプレゼン大会の枠を広げ、社会に開かれたびゅーてい大使の発表会を行います。



その4：みらいの「訪問」プロジェクト

世界を相手に働く人や、日本で活躍されている人の話を伺います。また地域の職場で働かせていただくことで仕事の魅力や働くことの本質に迫ります。どんな「思い」を持って働いているのかといった、実際に企業や専門学校などに足を運ぶことで、インタビューしなければ知ることのできない内なる想いをまとめます。



その5：みらいの「SDGs」プロジェクト（活動を支えるプロジェクト）

SDGsについて学びます。世界にある17個の課題も知ることで、仕事の美しさをより深く切り取ることができるものとなります。



OSAKA-KANSAI/JAPAN
EXPO2025

その6：みらいの「万博」プロジェクト（活動を支援するプロジェクト）

大阪は松井知事をはじめ、吉村市長や柿谷曜一朗を中心に大阪万博誘致に取り組んでいます。これは日本規模のプロジェクトであり、安倍首相も勢力的に取り組んでいます。「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに掲げ、今年の11月に最終プレゼンが行われ、投票により開催国が決定します。大阪の子どもとして貢献できることを考え、実行します。



その7：みらいの「絆」プロジェクト

個人だけで解決することのできない課題は、周りとの協働し、
教科・年齢・学校といったあらゆる垣根を超え、つながりを大切にし、解決します。

2. 学びの道しるべ

5月 9日	プロローグ：「しんたつ、みらいプロジェクトの開幕」
5月17日	第1節：「びゅーてい大使の次なる使命、なりたい仕事はなんだろう？」
6月1・2日	第2節：「自分たちではなかなか会うことのできない人の話を聞こう」*職業講話
6月	第3節：「自分になりたい仕事について考えよう①」
7月5・6日	第4節：「実際に体験しに行こう」*職場体験学習
7月	第5節：「感謝の気持ちと学んだ成果を送ろう」*職体事後学習
11月2日	第6節：「仕事のびゅーていを『むーびい』で伝えよう」*文化発表会
9～10月	第7節：「自分になりたい仕事について考えよう②」
11月	第8節：「大阪万博誘致の結果を知ろう」
12～1月	第9節：「実際に訪問しよう」*企業訪問
1月	第10節：「プレゼンを完成させよう」
2月	第11節「プレ・プレ」*学年発表会
2月16日	第12節：「なりたい仕事とその未来」*研究発表会
	エピローグ：「活動を通じて学んだこと」

*今回の単元は各教科でも学びをつなげることができます。また、取り組みの中でここに記載されたこと以外の取り組みが加わることもあります。道しるべは必要最低限のものとし、プロジェクトを遂行すること。

3. 今回のワークシートについて

今年度は、教室裏面に思いの「共有ボード」を各クラスともつくってあります。冊子にして閉じてしまうと自分の考えは自分で見ることはできますが、他の人がどう考えていたのかについては見ることはできません。なので、今回はワークシートの“追加制度”を導入します。先生たちは支援者として、周りの人が何を考えているのか、考えたことを共有した方が全体の学習が深まりそうな内容についてはワークシートを作成します。教科内で学んだことでも同様です。

①サイズは必ず **A4サイズ** で作成をし、共有ボードに差し込めるようにします。

②**発刊番号**をうち、全ての学びが終わったら発刊番号順にこの“学びの書”に差し込みます。

そうすることで、みらいプロジェクトは全てつながり、世界に1つだけのあなたの学びの書が完成します。

4. びゅーてい大使としての使命と予算

①みらいの私たちの仕事を「美しさ」でまとめ、発信します。

②**予算は0円**です。（新巽中学校にあるものは使用可）

③映像（Movie maker）を使って発信します。**パソコンやタブレット**を使用します。

*MMとはMicrosoft社の映像作成支援ソフトです。

5. 学びのストーリー

前編：「シゴトの、『びゅーてい』な！『むーびい』プロジェクト！！」

シーン1：しんたつ、みらいプロジェクトの序章

今回のプロジェクトをスタートさせる背景に、2年生の大きな主幹プログラムとして職場体験学習が計画されていました。これは職場体験学習に限った話ではありませんが、学校行事を行う際、いつもモヤモヤしているものが頭の片隅にありました。それは「なぜやるのか？」という問いです。もちろん、行事の目的は実施案の中に明記されています。しかしながらその行事が他の行事とどう関連しているのかや、3カ年の指導の中のどこに位置付けられているのか、今後の学習のどこにつながっていくのかについてはあまり意識したことがありません。ただ実施するだけでも忙しい学校現場です。「この行事を通じて生徒たちにどんな姿になってほしいのか」を会議等で十分に議論したり、共有することが難しい実態なのかもしれません。また、「今までずっとやってきたから」やるのが当たり前だと思っている先生もいることでしょう。そんな学校のあり方に「つながり」というキーワードで提案してみたのが今回の「しんたつ、みらいプロジェクト」です。この名前には「新翼」と「未来」がかけ合わさっています。生徒たちには自分の未来の生き方や社会の未来を考え、学習を通じてコミュニケーション能力や社会の経済活動について学んでほしいという思いから。また学校としては新翼中学校のこれからの学び方を提案することと、教科の枠を越えた学習形態のあり方を共にかけ合わさって創っていかうという思いを込めています。教科をつなぐキーワードとして「SDGs」を、地域をつなぐキーワードとして「万博」を骨子に組み込んでいます。さらに、目指す生徒の姿を共有するキーワードとして「21世紀スキル」を、学習全体を包むのは「PBL型の学習方法」としました。2年生は1年次に「大阪市、勝手に！！びゅーてい大使！」という探求型の学習を行っており、PBL型の学習は2回目の挑戦となります。今回の探求学習が大阪市の教育にとって良き提案となることを願っています。そんなことを思いながら再び答えのない学びへ、生徒と教師の探求のストーリーがスタートしました。

Time-out①：ESD 手島利夫、イマココラボ杉田博之、笑下村塾たかまつななと SDGs



4月はSDGsについて学習を深めるべく、教師も学習のスタート。まずはパナソニック教育財団のスタートアップセミナーと日を合わせ、第1回SDGsアワードを受賞した江東区立八名川小学校校長の手島利夫先生にESD教育



の実践について伺うことができました。ESDカレンダーの作成やカリキュラムマネジメント、なぜSDGsの学習が必要なのか新学習指導要領の内容と照らし合わせ、教えていただきました。また、4月に大阪市中心公会堂で行われたイマココラボ主催のSDGsカードゲームに参

加し、SDGs が達成されない世界がどのようなものかを体感し、学習の必要性を学びました。さらに笑下村塾主催の「笑って学ぶ SDGs」にも参加しました。芸人さんが語る発信はファシリテーターとしても非常に学ぶことも多く、8校 PTA 人権講演会でも生徒参加型の講演会を提案し、来校いただけるよう段取りを進めていきました。

シーン2：学びに火をつける、プロジェクトの開始！

5月9日、43期生たちにいよいよプロジェクトの内容を説明しました。大人になった君たちはどんな課題と向き合っていくことになるのか2030年問題を一緒に考えました。AIや少子高齢化、グローバル化といった課題はすでに大きな話題となっている内容ですが、今ひとつ生徒にとっては他人事のようでした。

生徒：「どうせそんな変わらんやん」

生徒：「俺コンビニの店員でいいし」

生徒：「ロボットがなんでもしてくれるんや」



自分が何かを生み出すといった視点どころか、どうせ自分ではない誰かがどうにかしてくれるといった意見が多くありました。そもそも13、14年しか生きていないので、時代の変化を感じるよりも自分の変化や身近な変化に焦点があたる時期なのでもっともリアクションなのかも知れません。時代の変化がどんなスピードなのかを体感させる必要があると感じました。しかし未来は行かなければわかりません。なので生徒たちに次のように問いかけました。

教師：「君たちの保護者が中学生ぐらいの時から今までの時代はどう変わったのだろうか？」

生徒：「そんな俺らがわかるわけないやん！」

生徒：「親に聞かなきゃわからないよ。」

案の定ですがこの問いに答えるためには昔にとっての未来、つまり今について調査するしかないとなったので、さっそく保護者アンケートを実施することにしました。事務局より発行された保護者アンケート、これを実施し、保護者の方の中学時代を調査しました。アンケートからはポケベル、PHS、黒電話、ショルダーホンなど通信機器の差や、バブル時代や女性労働者の環境の問題など、多様な変化があることがわかりました。スマホやパソコンで当たり前のようにインターネットにつながる今の子供たちにとって、インターネットが普及していない時代があることなどイメージすることもできなかったと思います。保護者アンケートを通じて、保護者の方にインタビューも行いましたが今では逆に想像のつかない話も伺うことができ、生徒たちも「これだけ20年近くで変化しているんだ…」という感覚と「自分たちの将来はどうなってるの？」という疑問が生まれることになりました。未来の職場はどうなるのか？この問いを探求するべく、職場体験に行って仕事だけではなく職業がどうなっていくのかを調査することにしました。

Time-out② : SDGs、職業講話、地域清掃



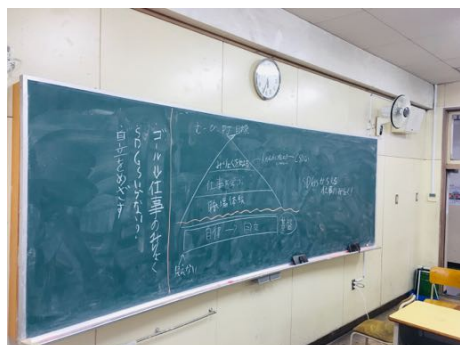
道徳の時間を少し活用し、SDGsの学習も進めていきました。「世界で一番食べ物を捨てる国、日本」という少しショッキングなテーマから食品ロスの問題がCO₂の問題につながり、地球温暖化につながる話など触れました。また、SDGsに取り組む企業、団体、基本的な考え方などを学習しました。また、実際に取り組んでいるNPO法人Homedoorの松本さんに日本におけるホームレスの問題の実態について、双日株式会社の川副さ

んより「双日が得る価値」と「社会に還元する価値」の2つの価値についての講話を行なっていたいただきました。また地域清掃も実施し、貢献することや社会の課題に向き合うこと、そのために、今の学習（知識をコミュニケーション力）があることを学びました。職業講話のあとは地域の方々と合同の地域清掃を実施しました。自分たちのローカル（地元）に貢献することについても考えました。

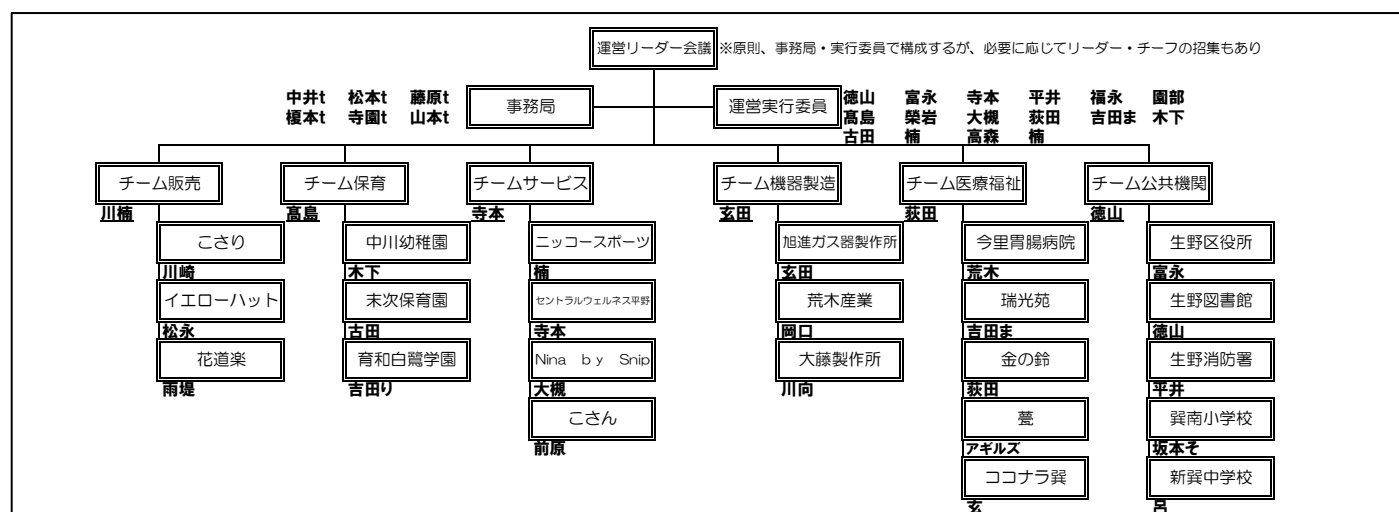
シーン3 : 実行委員の結成



今回のプロジェクトで学んだことは文化発表会で発信することになっています。「仕事の今どんなだろう？」や「働き方はどのように変化するのか？」といった内容を実際に働く人に伺ってみようというところまでは保護者アンケートから決定しました。また1年次にはパワーポイント（以下PP）を活用したので新たな試みとして映像編集ソフトを活用し、映像を含めて発信することを軸として進めることにしました。運営委員を募って進めていくことを予定していましたが、予想以上に16人ものメンバーが立候補してきました。1年次の取り組みのできた印象から多数集まってきたメンバーたちでしたので、全員で進めていくことにしようと思いました。運営委員と運営会議を行ったところ、お世話になる事業所は全部で23カ所。そのため事業所ごとに発表をされていては時間が足りない判断し、下記の表のように職業の種類を6チームに分けることに。そしてそれぞれのチームごとに内容をまとめていこうという話で進めてきました。発表のコンセプトやどんな内容を発信するのかについて全体が迷うことなく進んでいくためにたくさんの話し合いを行いました。



【実際のチーム編成図】



自分たちにしかできない発信とするためには実際に足を運んで得たことを発信する必要性がありますが、そのためにはどんな情報を集めれば良いのか？先を見通して問いを見つけることは非常に難しく、会議は非常に難航しました。また、部活動との時間の兼ね合いもあり、全員が出席することが難しい日々が続きました。次第にこんな会話が飛び交うように…。

生徒 A：「何で勝手に決まってるん？」

生徒 B：「昨日決まってるん」

生徒 A：「あっそ」（何で勝手に決まってるん??）

生徒 B：「一から説明すると時間かかるから…」（お前が休むから…）

合意形成を得ることなく進めるやり方や、合意形成をすることが当たり前のように思う価値観、たりない時間に進まない会議…相手の立場に立つことや、自分の感情をコントロールすることができず、不穏な雰囲気になってきました。最終的には運営委員以外の生徒から、

生徒 C：「実行委員だけで勝手にやっている」

生徒 D：「まずは実行委員がまとまらないと」

といった辛辣な意見も出てきました。内容もまとまらないし、どう進めていけば良いかもわからない。協力を仰ぐどころか自分たちの考えや気持ちもまとまらない。状況はまずい事態です。こんな状態にも関わらず、さらにもう一つの課題が運営委員たちに与えられることとなりました。

Time-out③：タテ持ち型の実践に向けた取り組み！！



本校は今年度からタテ持ち型の実践をスタートしています。そのため、5教科の先生を中心としてタテ持ち発祥の地、福井県への視察を行いました。今まで福井大学附属中学校が6月に研究発表会を行っていたので問い合わせてみたのですが、小中一貫の義務教育学校となったため発表会は11月に変更されていました。しかしながら6月に研究発表会に向けた校内研究授業を行うとのことだったため、英語、数学、理

科の3教科が研究主任の木下先生のご厚意の元、参加させていただきました。義務教育学校のプロジェクト型学習やリトルティーチャー制度など、充実した学びを得ることができました。また、生徒同士もスカイプを使って実践交流をしようという話もいただきました。

シーン4：福井大学義務教育学校との交流



6月23日（土）、福井大学のラウンドテーブル2018に福井大学義務教育学校の8年生、9年生とスカイプを使って交流する機会をもらいました。セッションの内容は「なぜ学ぶ？どう学ぶ？」というものでした。お互いの学年プロジェクトの取り組み実践を発表し、自分たちの考える学ぶ意義と学ぶ価値について発表することになりました。土曜日の交流とのことだったので、運営委員で部活動の調整がついた人のみの参加となりました。PPを使ってそれぞれの担当ごとに自己紹介、学んできたこと、学ぶ価値について分担してまとめていきました。文化発表会での発表内容だけでもまとまらない中でしたが、福井の8年生も「職業」について学習をの取り組み方は非常に参考になり、特に「共通の質問」を持った上で各職場に訪問したという情報をもらいました。共通点や相違点を比較する上で非常に参考になりました。また、福井の生徒たちもみんなの協力がなかなか得られない中で取り組みをしていることもわかり、どこも同じような悩みを抱えながら目の前の課題に向き合っていることもわかりました。彼らにとっては新しいことの連続だったので、非常に大変な取り組みになったと思いますが、全力で向き合ったそんなアドバイスののおかげで職場体験への取り組みも何とか前に進めることができました。

シーン5：いざ、職場体験へ！

6月中に履歴書を書き、どんなことを学びたいのか、自分の意気込み等をまとめ、事前挨拶を済ませいよいよ、7月5・6日（木金）職場体験学習へいきました。福井から学んだ「共通の質問」をみんなで共有して向かいました。職場の方には仕事の未来などなかなか答えづらい質問もあったとのことでしたが、この質問をきっかけに各チーム比較できる情報を得ることができまし



た。働くことの大変さや魅力も体験することができ、学校の中だけでは学ぶことのできない学びを得ることができました。

【共通の質問】

- 1) 仕事を選んだ経緯（きっかけ）は？
- 2) 仕事をやる前、後でのイメージの違いは？
- 3) （仕事を）やった上でのやりがいは？
- 4) 仕事をして得られたものは？
- 5) お金に対する価値観はどう変わりましたか？
- 6) その仕事の未来はどうなると思いますか？

シーン6：終業式でも！学年ポスターセッション！



職場体験でもトラブルなく終え、共通の質問を得て各チーム帰ってきました。いよいよ学んだことをまとめ、自分たちの言葉で私たちなりの探求のストーリーについてまとめることとなります。それぞれが職場体験でどんな内容かを知らないと、全体の発表としてまとめることもできないだろうという話になり、全体で共有する必要が出てきたのですが、運営委員の雰囲気は依然バラバラのまま。なんとか成功体験を積ませ、方向修正しなければという思いが教師側にも生まれました。今回は各チームで学んだことをポスターセッションで情報共有しようと計画しました。いささかトップダウンでしたが1学期中に実施するための時間も必要でした。終業式の学年集会をポスターセッションに変更、大清掃も調整し、1学期の最終日にポスターセッションを行いました。それぞれのチームで協力し、それぞれのチームでのまとめを行うことができ、何を学んだのか、それぞれのチームのカタチを見ることができました。しんどい中でしたが、一歩踏み出す勇気を持ってやることで、文化発表会での発表の方向性が見えてきました。

シーン7：ストーリーの再構成



2学期に入り、いよいよ文化発表会に向けて取り組みも本格的に始めることになりました。ポスターセッションで各チームから学んだことの報告がありました。各チームからの発表だと、持ち時間を考えると5分ずつ。それぞれの内容を共有してみたから見えた課題ですが、やはり内容がかぶってしまうことや、発表内容に差が生まれることが予想され、当初予定していたチームごとの発表からみんなで一つのストーリーをつむぎ、物語を作ってみてはどうかとなりました。

運営委員と教師であらすじの骨子を固めました。ストーリーはプロジェクト全般に関わっている教師が代表してまとめました。次のようなあらすじになりました。

【あらすじ】

- | | |
|----------------|-------------------|
| 1) プロローグ1（今と昔） | 2) プロローグ2（ド派手な未来） |
| 3) 仕事の今 | 4) 仕事の魅力 |
| 5) 私たちの町、生野 | 6) 仕事の未来とSDGs |

ストーリーは大きく6つの節となりました。この内容をクラスごとにシェアし、それぞれのストーリーをつなぐことになりました。それぞれの班である程度どんな仕事をすればよいかをイメージさせるために下記のような役割を提案しました。

班の役割	内容
班長 松本 t	コンテンツの切り目や実行委員のつなぎとの連携をはかります。6つの班が有機的に一つの作品になるよう内容を吟味し、班と全体を構成します。まさに、全体の スーパーコーディネーター 。
映像クリエイター 寺園 t	その名の通り、映像を作成します。ムービーメーカーを使用。タブレットで作成をします。独創的である、 新翼の頭脳、クリエイト集団 。
絵コンテ係 藤原 t	映像クリエイターに映像のイメージを持つようサポートします。台本を解釈し、イメージにするだけでなく、台本を昇華させる、まさに インテリジェンスファンタステック集団 。
演出係 榎本 t	映像の合間に寸劇を入れたりすることで観る人にとって変化をつけたり、伝えやすくします。映像に出演するのも1つです。キーワードは 「真面目に笑いを！」
照明係（2名） 山本 t	舞台上の照明の担当をします。自分たちのコンテンツの前後の照明を担当します。タイミングよく照らしたり、色とりどりのエフェクトを用いることで観客をむびプロの世界に誘います。 チーム「魅惑の光」！
音響係 山本 t	自分の映像の時の音響機器の担当を行います。音響機器はマイク、体育館音響設備、場合によっては独立スピーカーの使用も考えます。音は脳に、そして心に響きます。心揺さぶる心地の良い「音」を創ります！ 音のマエストロ集団 。
映像係 山本 t	自分のチームの映像をタイミングよく流します。実行委員との連携も必要。配線や機器の扱いは新翼一！機材全てに精通した 機器マイスター！
アシスタント係 中井 t	言わずと知れた「最高の心配り」集団！！普段は静かでも、会場作り、雰囲気作りに花を添える本校屈指の名脇役。今年のキーワードは 「思いをカタチに」

Time-out④：書画カメラの到来！



パナソニック教育財団の取り組みである「未来の『教室』プロジェクト」で書画カメラを各教室に設置することになっていました。機材も揃い、教員の研修も行いました。最終的には生徒たちが自分の考えを伝えるためのツールとして活用できるように思いを込めて整備しました。

シーン8：牛歩の1ヶ月半



このような形で再編成をし、それぞれのパートで分かれて活動をスタートさせました。運営委員もそれぞれの担当に散りばめ、ブレインストーミングでよりよい案を模索し、このプロジェクトの発表のタイトルも検討しました。タイトルは「スタートダッシュ～未来＝今×創造＋努力」に決定。今回のように2年生が舞台発表することや、本校の体育館が新設されて初めての文化発表会ということもあり、いろんな意味でスタートダッシュを切るという思いを込めてこのタイトルに決定しました。しかし、中身と発表までのイメージが全体で共有することができません。他者意識を持って発表することの難しさに全員がオーバーヒート。一部の運営委員だけの意見で発表することも学年プロジェクトではないし…教師団もどうすればよいのか見通しが持てず、不安ばかりが募りました。学年全体でつむぎ合わせることが困難な場合でも、全員が関われるプロジェクトでなければいけない、その思いから、WANIMAを「勝手に！オフィシャルパートナー」として勝手にパートナー契約を結び、発表の最後に「signal」を全員で歌い、感謝の

気持ちをカタチにするプロジェクトを教師から提案がありました。水面下で吹奏楽部やギターに挑戦したい生徒に提案し、学年がまとまってきたら…学年を最後につなぐために、今より少し先を見据えて取り組んでいこうとバックバンドから先に編成しました。

それでも依然として、内容はほぼ白紙のままでした。うわべばかりの言葉が並び、自分たちが発信したいことも固まらない日々が続きます。また、映像にこだわりすぎてしまったことも進まない要因の一つでした。パソコンのOSがアップグレードされ、動画編集ソフトがなくなってしまったこと（タブレットは使用可能でしたが）や映像で伝えるという「手段」が「目的」になって

しまったことが足かせになっている様子でした。なので、1年次で使用したPPを復活させ、PPメインで発表することを決めました。まずはどうにか形にすること、そのためにそれぞれの班の代表がPPを作成し、物語を作っていました。今まであまり前に立つ機会がなかった生徒たちもここで前に出てくることとなりました。

シーン9：殻をやぶる瞬間



発表者とPPは知恵を出しているその間、体育館の設備の確認やPC機器の配線の確認、音響・照明の整備など、同時並行して確認することがたくさん出てきました。本番まであと2週間、節ごとの内容をつなぐために、合同の発表練習を実施しました。ある程度練られたものに仕上がってきたところはあるものの、ネットで調べたことやうわべだけの言葉、特に仕事の魅力についてまとめる班の代表は、その内容のほとんどを、

生徒：「ポスターセッションで話した人に前に立ってもらう予定です」

教師：「話ができる人には依頼しているの？」

生徒E：「これからやります」

教師：「自分たちがまとめることができないことを丸投げしてるだけじゃないの？」

生徒E：「…」

節をつなぐどころの話ではなくなりました。全体像が固まることなくその日は終わりました。

この次の日、学校は土曜日で休みでした。しかし、この時の生徒たちが部活終了後、パソコン室で打ち合わせをしたいということだったので、場所を提供しました。

生徒E：「どうすればいいんだろう」

生徒F：「仕事の魅力を伝えるにしても、俺らも一つの事業所にしか体験に行っていないから、全体的話をすることができないよね」

生徒E：「だからポスターセッションで語った人たちに前に立ってもらいたいんだけどなあ」

生徒F：「でも6チームあるから一人1分でも6分もかかるよ。持ち時間は5分だから」

生徒E：「思い切ってさ、2つの節をくっつけて、時間確保するのはどうだろう？そして発表の中にポスターセッションを復活させてさ、そもそも、あらすじに沿ってやるから自分たちの言いたいことが伝えづらいんじゃない？」

生徒F：「あらすじそのものを変えるってこと？」

生徒E：「説明もあらすじのままでやるから自分たちの話したい順番にならないんじゃない？今の説明の順番を入れ替えて2つの節をくっつけてさ…映像を入れるなら福井とスカイプでつながったようにポスターセッションの現場をテレビ中継みたいにして発信したらどうだろう？」

生徒H：「そしたら僕たちの班で困っていたまとめもスムーズになるで！」

生徒 F：「全体をまとめるために困っていたすべての課題を解決できるよ！！」

生徒 E は前日まで、自分たちの発表を周りに助けを求めている生徒です。自分の課題や周りの課題を総合的に考え、新たなプランを提案してきました。そのアイデアは発表のすべてを改善することができ、発表の見通しまで立てることができたので、案を全体に下ろすプレゼンを行うことにしました。

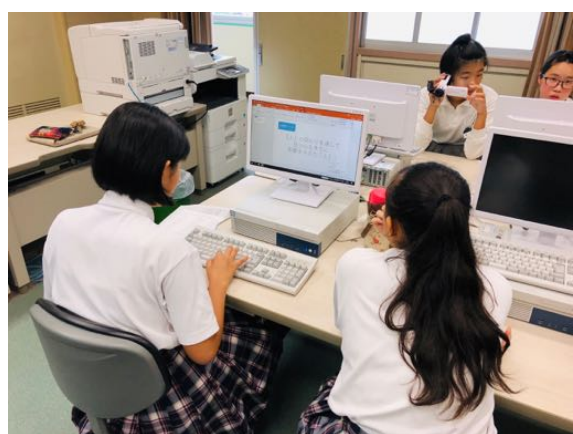
シーン 10：同意形成



3人の生徒は現在の学年発表の現状と課題を伝えた上で改善案を提示しました。10分程度で同意を得ることができると予定していましたが、今までのまとまらない雰囲気や不安な思いを抱えています。案を提案してからなし崩し的に進めると人任せな雰囲気が出るかもしれない。そう判断し、教師側からも質問を入れてみました。すると、たくさんの意見や質問が出てきて、学年の発表をどのようにまとめていくのか、今まで心が離れていたのではと思う43期生が具体的なアイデアを通じて少しずつ「やってみよう」という思いに進んでいきました。気づけば50分を越える全体会議となりました。提案は受け入れられ、大きな軌道修正を行うことを全体で決定しました。発表まで残り10日の日の出来事でした。

3人の生徒は現在の学年発表の現状と課題を伝えた上で改善案を提示しました。10分程度で同意を得ることができると予定していましたが、今までのまとまらない雰囲気や不安な思いを抱えています。案を提案してからなし崩し的に進めると人任せな雰囲気が出るかもしれない。そう判断し、教師側からも質問を入れてみました。すると、たくさんの意見や質問が出てきて、学年の発表をどのようにまとめていくのか、今まで心が離れていたのではと思う43期生が具体的なアイデアを通じて少しずつ「やってみよう」という思いに進んでいきました。気づけば50分を越える全体会議となりました。提案は受け入れられ、大きな軌道修正を行うことを全体で決定しました。発表まで残り10日の日の出来事でした。

Time-out⑤：体育大会、ピクセル画、合唱コンクール、生徒会選挙、パナソニックプレゼン

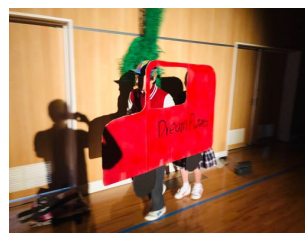


もちろんですが、2年生はこのプロジェクトだけを行っていたわけではありません。今年初のタテ割りの体育大会や文化発表会の全体の作品であるピクセルアート、当日の午後のプログラムである合唱コンクールの練習、自分たちの代で編成される生徒会選挙、またパナソニック教育財団からプレゼンテーションコンクールの案内もあり、3名の生徒は校内選考会に向けて自身の思いを語るプレゼンテーションの準備などに追われながら進めていました。時間管理がうまくいかないところも出てきた時期でもありました。

シーン 11：本番1週間前

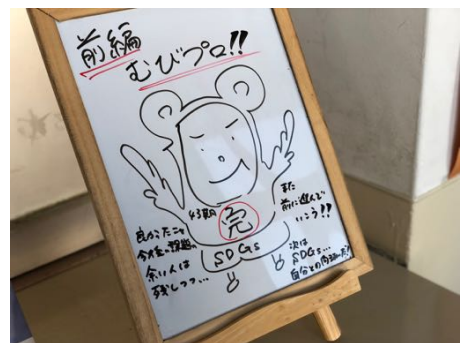


大きな軌道修正後、限られた時間の中でその他取り組みのプロジェクトも。まず、職場体験でお世話になった方々を招待することになっていたの、お便りチームを編成。また、勝手にオフィシャルパートナーに任命したWANIMAにも歌うことを手紙で送りました。バックバンドの吹奏楽部



も文化発表会で演奏がある中、合わせの練習。ギターも部活終了後、残って練習。体育館での機器の使い方の講習、映像班のデータ編集、寸劇を入れることにもなり、必要な音響のCD作成、小道具の作成などあらゆる準備が目まぐるしくありました。そんな中、1回目のリハーサル。すべての打ち合わせを含めると1時間以上かかりました。直前まで修正を繰り返し、2回目のリハーサルを。時間内に収まったものの内容はやはりわかりやすいものではありませんでした。リハーサル後にリスナーの生徒たちでブレインストーミングを実施。どのように修正すれば良いのか、改善に向けた会議をしました。発表者とPP作成者からするとアドバイスとして受け入れたい反面、こんなに頑張っているのに…といった思いもあったかもしれません。しかし、意見と改善点と向き合う必要がありました。前日の最後のリハーサルは通しの1回だけ。修正等は各担当ごとに行うこととして本番を迎えることとなりました。

シーン12：最後の悪どくみ



前日のリハーサルを終え、不安な点が数点出てきました。本人たちにどう伝えるか考え、当日、体育館後ろに2つの映像を投影することにしました。一つは歌の歌詞。合唱コンクールの練習に力を費やしたので歌詞を覚えていなかったからです。もう一つは、43期生にメッセージと修正点を。細々と失敗した点はありませんでしたが、生徒たちの本番の調整力は素晴らしく、笑いあり、学びあり、43期らしい半年間のストーリーを、またお世話になった職場の方々への感謝の思いをどうかこうにか、会場に届けることができました。「未完成でもいい、肩並べて」というWANIMAの曲の歌詞にも学年集団一同、支えられました。

シーン13：前半戦の成果と課題



今回の前半戦は今まで主として活躍していた生徒以外にもたくさんのヒーローが生まれました。「できる人が、できるときに、できることをする」をキーワードに実に至るところで隠れた立役者がいたことがわかりました。批判的に物事を見つめ、型を破ってより良いものにするという発想を学年として体験できたことが非常に大きなものであったと思います。一番印象的なのが生徒Eの発想で、（もちろんそこに至るまでたくさんの人が悩み、苦しんでもがいたからこそですが…）大きな軌道修正を提案し、発表を成功へと導きました。学校での学習活動を通じて、誰かを幸せにするという成功体験を持つことを学習の目的の一つとしていましたが、まさにそんな一面を垣間見ることができました。自身の関わりに対して消化不良だったものや、もっと関わることがあったのでは？と振り返っていた生徒が多かったのも、次へつながる成果だと捉えています。

一方大きな課題も見えてきました。それは、「手段を目的としている考え方」です。今回の課題に直面した背景には、「映像を使わなければならない」、「班の役割はその通りに遂行しなければならない」といった考え方があったと感じます。目的は「仕事について学び、その魅力（美）を文化発表会で伝える」であったはずなのに、映像を使って発信することにばかりとらわれていたように感じました。道のある程度整えることも必要ですが、道に縛られてしまうことがあるということも学びました。後半戦はこれらの課題を踏まえ、2つの視点を持って取り組みます。

- 1) 目的第一主義（手段にとらわれない）
- 2) 全員リーダー制（目的達成のため仕事や役割にこだわらない）

Time-out⑥：パナソニックプレゼン優秀賞・奨励賞受賞！！



校内選考の結果2名をエントリーしました。その結果、2名とも最終選考に残り、一人は優秀賞、一人は奨励賞を受賞しました。他者意識と目的意識を持って伝えることの大切さを学んだとともに、学習の結果が出たことは生徒たちにとっても自信となるものとなりました。 <HPにも掲載されました！↓>



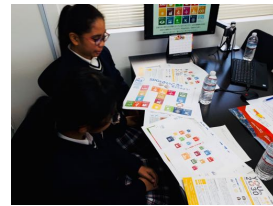
後編：「みらいへはばたけ！世界の『びゅーてい』大使プロジェクト」

シーン14：SDGsを深く知るために

文化発表会が終わり、次なるプロジェクトへ。学習を進めていく中で、SDGsについて触れることが多くなっており、自分たちもできることをやっていこうという流れになりました。しかし実際にやってみようと思うものの、自分たちの身の回りにある給食の残食の問題、また電気のムダづかい、日常で起こる小さな課題すら解決できないのにこんな世界のことなんて解決できるわけがない！と感じるものが多く、「机上の空論だ」「口だけだ」といった考えが多く出てきました。そのような考えに対して、「大人はどのように取り組んでいるのだろう」という問いが生まれたので、企業訪問を計画しました。訪問先の企業は関西SDGsプラットフォームに登録している企業や活動を通じて知り合った企業に協力いただき、最終16の企業に訪問することになりました。どの企業も快く受け入れていただき、非常に学びの深い学習をすることが出来ました。生徒たちの帰ってきたときの顔つきは半信半疑だった出発前とは別物でした。知識もさることながら、非常に大きな刺激を与えてもらいました。引率した教員も社会の取り組みにふれ、生徒と同様学び多きものとなりました。

【訪問企業一覧】

- ・株式会社スタジオキャンビー
- ・株式会社HTA デザイン事務所
- ・塩野義製薬株式会社
- ・大日本住友製薬株式会社
- ・Gochiso 株式会社
- ・株式会社クボタ
- ・IDEC 株式会社
- ・株式会社日本免疫粧研
- ・株式会社竹中工務店
- ・フロムファースト株式会社
- ・デジタルファッション株式会社
- ・大阪ガス株式会社
- ・株式会社内田洋行
- ・読売新聞大阪本社
- ・辻調理師専門学校
- ・株式会社読売連合広告社
- ・リロ・パナソニックエクセルインターナショナル（株）



シーン15：社会的責任を持って

16の企業から世界の課題解決に向けての取り組み、情熱、思いのバトンを受け取りました。企業の方々のプレゼン力も圧巻だったとの報告も印象的でした。事前に学習発表会の折に学んだことを発信することを伝えていました。なぜならSDGsの日本の認知度は12%で世界の5分の1も知らないのが現状だからです。中学生にもできることを考えて発信性の高いものとするために、実行委員会のメンバーは打ち合わせを行いました。

シーン16：しんたつ万博へ

企業訪問で学んだこと、また自分たちが今年一年で考えたことを発信する中で、「どのように伝えれば伝わるか」が一つの問題点となりました。学習発表会の時間をいかにデザインを考えた結果、2025年の万博も参加体験型のパビリオンが多くあることをヒントに、「発信・見学・参加体験」の3つのキーワードを軸に取り組みを行うことに決めました。



最終は下記のようなブースを作成し、発信することに決めました。

発信型	見学型	参加・体験型
SDGs チーム 企業×SDGs チーム	ストローアートチーム イラストチーム モニュメントチーム	SDGs すごろくチーム SDGs かるたチーム SDGs クイズチーム



シーン17：反省を踏まえて

前回は係や役割を教師側が決めてしまったことで、色んなところで言い訳できる原因を作っていました。しかし生徒たちに役割分担のロールモデルはあると判断し、今回は全て生徒たちでメンバー編成を考えました。結果、実行委員を中心に希望を取り、全体と合意形成を図りながら6チームに編成をしました。取り組む内容や目標は共有していたので6チームの中で、それぞれ自分たちで仕事分担を行っていました。今回の発信は相手が大人と後輩たちです。大人にも伝わる内容にする緊張感と、後輩たちにつなぐ取り組みとなるべく、できることを進めています。



シーン18：#しんたつばんぱく

学んだこと全てを、そして自分のできることの全てをやる日、研究発表会がやってきました。朝から通常通り授業を行い、最終の発信へ。会場へ入ると今回の全長4mの巨大モニュメントがお出迎え。ライトアップし、会場へ入ると、今回の取り組みムービーが上映されています。映像が終わると今度はオープニングアクト、世界の課題を伝えるべく、未来から宇宙人がやってきて、未来の現実を訴えてきます。SDGsがなぜ必要なのか、そしてどういうものなのかを会場の全員に知ってからその後のプレゼンや作品を見て欲しいというチームSDGsのメンバーが自分たちで寸劇チームを志願。大舞台上で気心の知れない大人や後輩相手に発信をしました。無事に基調講演が終了すると、各ブースの代表者たちが会場図をもとにブースの説明を行い、各ブースの発表に移りました。設定していた時間が短く、参加者からはクレームの嵐（笑）それだけ生徒たちの想いのこもったプレゼンが参加者の心を打ち抜いたのだということです。

また、チームアートもストローが海を汚染していることをメッセージにするために、全体で給食の牛乳のストローを使うことを止めようと提案しました。「ストローを使ってメッセージを。」チームアートの作品も見事なものでした。

チームお茶出しは、来校いただいた方々にお茶を出そうと取り組みを実施。最初こそ目的意識を共有できずに一悶着ありましたが、お茶出しでもSDGsを伝えるという目的が共有されてからは、「フェアトレードのコーヒーを出そう！」や「紙コップにポップをかき、世界の課題を伝えよう！」や「ポップの課題をより詳しくまとめたポスターを展示しよう！」とアイデアを形にし始めました。たかがお茶出し、されどお茶出し！！目的意識があればどんな取り組みにも工夫ができるのだと、生徒たちから学んだ瞬間でした。

チームアクティビティはSDGsすごろく、かるた、クイズパネルを作成！「遊んで学ぶ、SDGs」がキーワードで



した。しまいには時間が余ったからといって神経衰弱まで
つくる始末（笑）。アイデアカに脱帽でした。

1年生は2つのプレゼンブースで大阪市の魅力の発信プ
ロジェクトを。1年生とは思えぬ表現力で物怖じしない発
表でした。来年が楽しみです。また、英語の授業、

「Global Actions」で作成した「英語で学校紹介ムービ
ー」も上映。最終はマレーシアの学生と交流し、学校紹介
を送りました。とても良い作品で、これもまた参加者の度
肝を抜いていました！

3年生は受験間近ということで直接参加はしませんでした
が、「DISCOVER～未来の自分発見～」で学んだ修学旅
行の取り組みムービーを上映していました。また、これも
英語のプロジェクトでまとめた世界の魅力を発信していま
した。全学年の1年間のプロジェクトをまとめて発表する
のは初めての試みでしたが、文化発表会とはまた少し雰
囲気の違う中、生徒たちからするとまさに「異様な他者」、
OECD が表現しているコンピテンシーに近い相手への発信
をすることができた1日となりました。



シーン16：エピローグ

生徒たちと学んだ1年間を綴りました。生徒たちは非常に満足げな表情で、当日は解散したと聞きました。プロジェクトが進めば進むほど、生徒たちが何をしているのか、どんな活動をしているのかを把握することはできませんでした。しかし、一つの目標に向かってそれぞれが取り組みを進めているという実感はありました。「信じて任せ、他人に頼る。」これがPBL型の学習実践では必要なことだとも感じました。また、イレギュラーもたくさん。生徒たちはSDGsのピンバッチをつけて発信したいとか、予算オーバーのものを作成したいとか…その都度、生徒に返した言葉は、「〇〇先生に聞いてごらん」でした。しかし、その先生たちも生徒たちの思いや取り組みの姿勢に肯定的な姿勢や、より良いルール提案をし、一緒になって取り組んでくれました。最後は恒例の映像で振り返りでしたが、私は授業のため、その場にはいませんでした。タテ持ち型の都合上どうしようもない時もあります。それでもICT機器を使えば、その場にいらなくても映像で登場することもできます。できることは任せ、感動を共有するところは共有し、それぞれが自分の役割をこなす、大人もPBLだなあと感じる瞬間でもありました。アンケート結果も生徒たちにすぐレスポンスし、生徒も自分たちの成し遂げたことに対する評価をもらうことができました。最終はSDGsを発信するというミッションになりましたが、生徒たちに問いかけた「働く魅力ってなんだろう？」については、それぞれの心の中に「働くってものまんざらでもないかな」や、「ちょっと社会で働くっておもしろいかも?!」という心が芽生えたのならこのプロジェクトをやった価値があるというものです。振り返ってみると、みんなの居場所が少なからずできたのではと、そんなことも感じる1年間となりました。中だるみなんてする暇もなかった43期生の2年目の探究は充実感と、少しの疲労感を残し、幕を閉じようと思います。





×

しんたつ、みらいプロジェクト

×



OSAKA-KANSAI/JAPAN
EXPO2025